

第七回 「ロナルド・ハットン教授と鏡リュウジ先生」

岡部 芳彦

魔女・魔術・現代ドルイド教の歴史などの世界的権威で、僕の受入れ教員であるロナルド・ハットン教授に会うため、占星術研究で有名な鏡リュウジ先生がブリストルにお越しになりました。鏡リュウジ先生については、「ソロモン流」や「情熱大陸」などテレビ出演も多く、人気のテレビタレントとしてご存じ方は多いかもしれません。それに比べて、京都の2つの大学で客員教授をお勤めで、学術的にも非常に豊富な知識を有していることはあまり知られていないように思います。占星術の知識だけではなく、心理学などを応用した多角的な視点から分析されるアカデミシャンとしての一面をお持ち



「ロナルド・ハットン × 鏡リュウジ」対談

です。以前から、ハットン教授の講演などもお聞きになられていたそうです。今回僕がたまたまブリストル大学に受け入れてもらったことをきっかけにお話しがつながら、「ロナルド・ハットン×鏡リュウジ」対談が実現しました。

場所は、僕とハットン教授が初めてランチをした Highbury Vaults パブ。19世紀初頭までは絞首台の隣に位置して死刑囚が最後の食事をした場所です。鏡先生は20代前半のときに『魔女入門』なるご著書があり、ハットン教授の研究について早くも紹介されています。挨拶等をのぞき個人的にはお互い初対面と聞いて、どんなお話になるのかワクワクしてなかなか寝付けません。そこで真夜中にハットン教授と鏡先生の本を手に取りました。

まず『Triumphant of Moon』から。ロナルド・ハットンの名を世界に知らしめた記念すべき著作で、現代に復活した異教主義の意味するところは何かを歴史からひも解く大著です。さまざまな分野から引用され、ハットン先生の豊富な知識に圧巻される一冊です。

次は『Which, Druid, King Arthur』です。ハットン教授のエッセー集となりますが、魔女、現代ドルイド教などのペイガニズム（異教主義）、アーサー王伝説とハットン先生の研究対象や興味がググッと詰まった一冊で個人的には一押しのご本です。

最後は鏡リュウジ先生監訳ニコラス・キャンピオン著の『世界史と西洋占星術』です。ローマ時代から現代まで、占星術に関する初めての通史です。ハットン教授の著作も多々引用されています。鏡先生は占星術関係の著作の優れた翻訳者としても知られており、567ページにも及ぶ大著を監訳されています。

ハットン教授の弟子で非常勤講師のアレクサンダー・カミンズ君も同席です。彼とは大学のセミナーで話すことがあり、17世紀の民間呪術をはじめ心や体に影響を与えた哲学全般にも研究対象を広げています。

なにしろここは処刑場だった場所です。夜になるとやはり幽



Highbury Vaults パブにて。

霊など現れないのか心配なのでお尋ねしてみたところ、「でない。夜は幽霊が逃げるほどパブは混んでいる」とのこと。お話上手なハットン教授らしいユーモアです。次のハットン先生の大きな学術的なプロジェクトは妖精学関係だそうです。また、この秋にはイギリスの歴史専門チャンネル Yesterday で、週一回の冠番組「Professor Hutton's Curiosity(ハットン教授の好奇心)」が放映開始になるとのこと。もしかするとそのうち日本でも見ることができるともかもしれませんね。

オカルティズムや魔女関係だけではなく、大学の教育についてのお話もありました。日本では若い学生さんが歴史学を大学で学ぼうと思っても、資格や就職に直接つながりそうな専攻を選んでしまうかもしれません。しかしハットン教授によれば、おそらくはイギリス全体で、また少なくともブリストル大学の歴史学専攻の学生では、就職に困る学生さんはいないそうです。理由は、歴史を勉強することでその過去の経験の蓄積に基づいて交渉術や状況判断能力が身についていると評価する企業が多いからだそうです。この点は日本と大きく違うと感じました。

熱く、また非常に和やかでもあったひと時もあっという間にすぎ、最後にパブの裏庭で写真を撮りました。いろいろなご縁で実現した不思議な出会いを象徴するように、青空ながらも3月には珍しい雪が降っていました。



Highbury Vaults パブの裏庭にて。
鏡先生が手にするのはハットン教授の
『Triumphant of Moon』とカミンズ君の新著。